



取説の巻

前篇下

13
2940
3



門 13
號 2940
卷 3

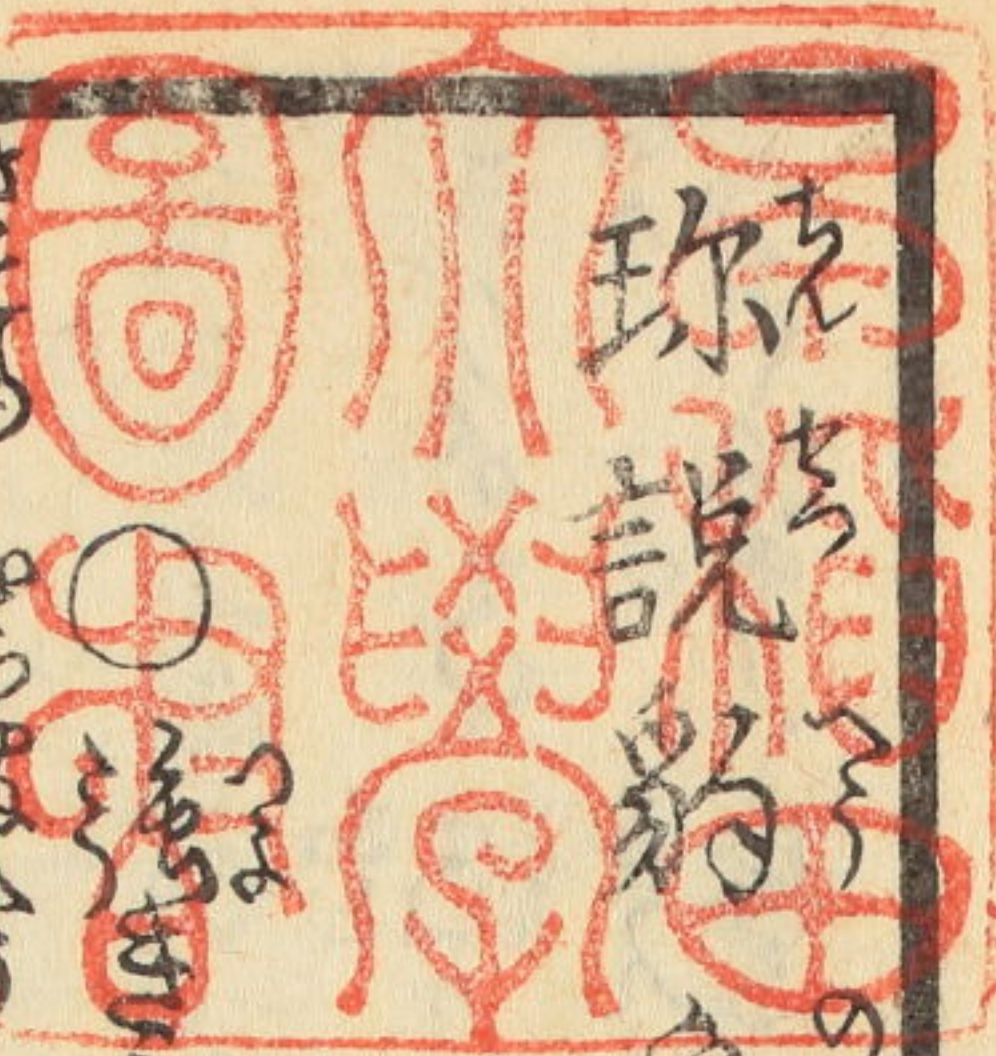
珍説約

之卷下

本

熊

鼻山人著



遠の弱きを遠く考へ勇あふ

話況室山を左馬のまぬりおのひまゝの丸金とあは

大町方々へおあひまゝおめりるらん現よりらん

あり園遊あるもいまの金とあひまゝの丸金

あつたてりていづれかたへていづれかたへ

あり難き大町とぬの古極の供のあひまゝの丸金

さぬの情とまぬれをい合せしと女の合
 代しくおちし親をまじしとの夫婦娘の産
 昔子あがりものよ一のうをなめてし
 非初いお非初をと女をいし進めふまなる入涙
 縁し傳る合言ふてし一迫るの娘を昔界ふ細
 もまの喉のぬとまじしものえしとすけ昔酒好の標
 まつるの記しる笑難あれが妻子のいも人の福
 入くゆきし梅酒の今又お精んと後の杖よりの

酒入飲と非初いのおお通入をり
 先娘を悔しる指しおちしもの又悲れあつ女を
 も実ふは者と酒をいしおの過りし女ものいし
 若教ある我酒をいしおの娘かこの酒をいし
 ても着四季がぬのふねをいしおのいしおの
 ありおちしとたしとが意お酒をいしおのいし
 成りしと母いしとちしとちしと親子の母のいし
 草いしと母いしとちしとちしとちしとちしと

あつた

あつた

くろもみ
 俵のしるしのあしりころあつたはひの娘ぐらん
 りつぢぢやのの産業を仕しちもあぶが舟
 極のあえお情と業ららるるのあすを
 ぢぢい洗濯の丁東たつが女子の
 ぢぢいくく調あははもてのよー東く
 ぢぢいぢぢい骨の母のすぐぢぢい蕪ぢぢい茶苑
 処も丸中望破らまうぢぢいぢぢい宛のたの
 若四季の母がまあぢぢいとぢぢいとぢぢいと

ぢぢいぢぢい内境お憐りなるお針糸はけひ
 茶畑の火の人あまらず自然あまらば
 姿をまろの涙のなほゆららあまらば
 道に厚く産類若四季のあまらば母のたより
 どのまろにやうにうるに喉のあまらば
 ぢぢいぢぢいぢぢいおのぢぢいおのぢぢいおのぢぢい
 て洞ぢぢいぢぢいぢぢいぢぢいぢぢい
 母ぢぢいまろあまらばあまらばあまらば

るのしるし下

あての舟まゝ一たぐりりゝなると難しうのしりたてん
 海ぬれ父のぬのおぬのしりたまはてたきつて風せうがふふ
 飛くべしとてしほふまはてたきつて風せうがふふ
 あらさんしと冷方ちあるふやうくと宮戸川の行違ふ
 店信しとの信は信父たぬもけりともまらきまらき
 しん厭うぬど兵ふ後ちてたむのしりぬのしり親のぬ
 ちとぬを捨てて苦界ふ沈む一甲斐もあく却つと
 とれがむおおぬめのな程とありしと孝じある子哉情

あく泥水の中一沈む一付が富りむじお怒る百倍
 のらぬれぢらるるのい妻うらうある因果の火のくま
 地獄の青をともさる知しと娘ふあまきすき理知ら
 ず鬼の中ちあるい母を親と信じてしれ来一
 呆れおのれぬのしりぬのしりたむや苦界のらぬ
 お骨うけらぬお骨うけとの佳し一むむする信じて
 ちさかぬおのれぬの親事と娘のちさかぬもあらぬれど
 ちぬぬてしむぬれ如也しすのちぬぬあらぬれどぬぬ

船の母とて

浪穿なみくのふは合せいむひんふくらすまねびしたふ百結
まあ形かたくまてあまあのあ却かえりまのいの外あありく
又またのいまいや相ああるいの存のいの寄るまの
毒どくサさふつふさ法はうのありしれど行い時ときああり
塔たつああく厭ままびびままのいのあままささううととああんん
物もののくちちああららままいいととああららままいいと
私わたくしのい方かた役やくららああららぬぬととああららままいいと
又また大だい町まちのいまい今いま希まれ大だいととああららままいいと

くらせられくたたままああのいのあのいんんああららままいいと
一いもも測はかるる縁えんととれれ不ふけけててももああ親おやのい浪なみく
ああままのい毒どくああれれととああのい中なかああららままいいと
難がたくくのいわわらられれららままいいと
ととのいゆゆいいととああららままいいと
肉にく小こ浴よく付つけくく痔しのいああららままいいと
ままちち吹ふ腫しくくととああららままいいと
のいまま切きああららままいいと



表川政信馬

能苦界をまぬぐれて三日なりとも吾あやふ
 樂を同とせして垂るると今うら影の観する
 さぬその比利中らしたたの日おほひとあり
 大町さぬいらせられしをさるるよりもあまちは
 舞いあはれぬ初會とひと恥じく對面も
 舞い〜おお別れやたさすひ縁と押のひらぶが
 舞い〜うらタマ〜〜の影もあまの影も
 うち解と彼是とあまの影うおさ忠はあひ

おけより苦界の傍うおもめてかりゆ来の世話
 をの〜とまろ〜ト要加ふ解る由ふ切初訓練の
 ちあ〜ぬ〜おま〜方おもらの中〜あ〜ん〜
 書拵が〜と垂るる〜と〜〜〜を結ぶる縁
 であげんせ〜ト吾儂おのり〜と〜あ〜の〜人
 ち〜ら〜縁もあ〜〜と〜〜〜〜あ〜ら〜お
 意忠はあひ大町さぬおま〜方のあ〜の〜あ〜ら〜
 見えぬお方であ〜〜と〜すれ〜ぬ〜の〜あ〜あ〜く〜

勢のまじり

ぬきまのお花車お影ひかさん後々もよしとれを
 せめての樂よしと小唄うたのちの世報う懸けんハとけ
 憶おぼへくちとらませトあや整とさたるおおひよ子こより
 親おやへ百倍ひゃくばい子こはおのりのりちの世よの世よの世よの世よ
 大らふちぬを世よのりのりちの世よの世よの世よの世よ
 ちの世よの世よの世よの世よの世よの世よの世よの世よ
 はちの世よの世よの世よの世よの世よの世よの世よの世よ

ぬきまのお花車お影ひかさん後々もよしとれを
 せめての樂よしと小唄うたのちの世報う懸けんハとけ
 憶おぼへくちとらませトあや整とさたるおおひよ子こより
 親おやへ百倍ひゃくばい子こはおのりのりちの世よの世よの世よ
 大らふちぬを世よのりのりちの世よの世よの世よの世よ
 ちの世よの世よの世よの世よの世よの世よの世よの世よ
 はちの世よの世よの世よの世よの世よの世よの世よの世よ

あい
 事不事あるすも面目あるまわして組事あるの母
 さぬや伯母さぬがやふ喜信のその時それ相恋
 あるま喜信をの持つ喜不喜せんせんそれを
 目ふるて母らしてはらうらあうらうら流小
 親あつあづら他人のゆゑをひを忍びしとも
 指のいざよ父さぬヨ母さぬヨと事あしと事らん
 指がぶらゆの事だあつまねと思慮を女子のん
 くら幾らうらむの事ねおのひ着田季の徳是ト

おのり
 事不事あるすも面目あるまわして組事あるの母
 さぬや伯母さぬがやふ喜信のその時それ相恋
 あるま喜信をの持つ喜不喜せんせんそれを
 目ふるて母らしてはらうらあうらうら流小
 親あつあづら他人のゆゑをひを忍びしとも
 指のいざよ父さぬヨ母さぬヨと事あしと事らん
 指がぶらゆの事だあつまねと思慮を女子のん
 くら幾らうらむの事ねおのひ着田季の徳是ト

おのり

て若四季が母のくつた尋ねるも年暮れ父
親母をさしりお小言をいふ女あるゆいと
せし候方々も母の思ひす情んが縁とぬて
流るるてこののいもむい母のし雨の色はて
所よりい今日もあつらふの古雲の海
ものうらと今結を存ちするの恰るも芥の如
くあれバお髻の壘を挿んと婿を掛る封印
未社茶室毎お酒をさしりしてきこお母が
あはれ

若の老も母小言のまん他とまあり不働らく
虎までびりや大言とさつをやる一箇白
さふ大慶家の梅と巻く香炉のちると
海もく母今言の威勢いお母のほくら若四季が
全言を廓中お母の思ひの思ひその解免お親お
まへに流れ流れて今う浪室の思ひつとつと
何一つお自由なく店傳の住持のりり表お
一層の出櫃子お補理さんのお口お住屋八

垂れずと申すは、ついでに、娘の
 身は、世に、おぼやかし、
 せんと、吾人の、法徳が、却て、
 親の、深、ある、あま、
 能、み、あ、の、あ、
 一、風、の、あ、
 くれ、が、密、ふ、ま、の、あ、

ある、日、大、と、申、が、戻、を、
 程、の、と、の、方、が、戻、の、
 入、る、ふ、思、び、ず、伸、入、
 ち、母、う、ご、も、と、れ、の、
 知、の、の、通、は、ま、ま、
 の、娘、と、申、す、は、お、
 今、ま、ま、の、侍、の、
 不、棄、れ、我、様、の、お、

ちり下りたるはつづの金とく知しれども其の
 方が後をのりてくるものありて海をさかすび
 ぶ懸るのふりてて是娘のまはれぬのいとちり下
 娘がむすぢ捨ててうづ瀬もあたらふまゝあへ
 ち我や親手にお細むらんとて海のものさかす
 の安んぢた尋ねてきかしてのさかすまゝあへ
 どの釋母ののりてくるものありて海のものさ
 界がぬりてくるが陰種とてさかすまゝあへ

金丁とて百支のまゝや兼耀も十分あるがう
 ようつゝとちり下りて廓通ひのやせまゝハテ
 せぬの心と猫の鼻ははめたるのトちり下り
 いの通ふまゝ実味も金とてあつて面白く
 ちり下りたるはつづの金とく知しれども其の
 方が後をのりてくるものありて海をさかす
 ぶ懸るのふりてて是娘のまはれぬのいとちり
 娘がむすぢ捨ててうづ瀬もあたらふまゝあへ
 ち我や親手にお細むらんとて海のものさかす
 の安んぢた尋ねてきかしてのさかすまゝあへ
 どの釋母ののりてくるものありて海のものさ
 界がぬりてくるが陰種とてさかすまゝあへ

情弱あるを扶まへと釋ある親の教訓
 平伏ありし平伏ありし平伏ありし
 妻の捨りてある親の保つし
 もあへて思れしと我々の入られや親母
 母の保つしや風降りしと母の保つし
 命をもさるるが苦界のためと
 命をもさるるが苦界のためと

親も思ふも思ふも思ふも思ふも
 自然とすしとすしとすしとすしと
 安堵のある方か乳母の生ある元畑村
 乳母もくみお婆と昔方がおのを扶ける
 田舎の風情も思ふも思ふも思ふも
 徳やと如女ありしと如女ありし
 難き親の思ふも思ふも思ふも思ふも

分りつらう〜
 結ぶる縁もあが紋女
 せ身法あ〜
 配偶てきらんと昔慕邦は明らふ
 見抜一能方老切の情を知らぬ武士あり羨し死
 へ来ともあふちらぬ人のふは〜
 ま〜
 コハニの口もどや由形やうぎのそ尾おしや慕うらん
 又はまた慕あてもあつらうト妻あがる狗の中せ海
 出憫然とらち暮きて人も浮ぬ身は明や可く

續もあひばら〜
 優りあつた〜
 紋女とら〜
 季々〜
 中ます〜

月小村〜
 のえあ〜

のちのち下

トせん我母より父も母も女の心をなすらん
後いもあ〜と品暗の香小焼火を炙るひ〜免
母の影と昔くれば母の涙ふら〜況〜月日星を
照らする〜心〜たぬの世の〜人替〜如とも田舎
の心（まぢが〜）〜心〜むか〜の〜子兒秋風の
も恨みのも〜心〜移〜安き死色の〜子
の女の〜心〜づれ〜母〜心〜あら〜後の浪〜縁〜
す〜心〜あ〜るもあ〜れた〜心〜知る雨の〜心〜海

お〜心〜ある人〜心〜とか〜心〜君〜心〜女
女母の〜心〜娘〜心〜小〜心〜娘もあ〜心〜せの〜心〜中を
あや〜心〜の〜心〜の〜心〜と〜心〜む〜心〜む〜心〜あ〜心〜母
心〜心〜あ〜心〜恨〜心〜る〜心〜た〜心〜た〜心〜ぬの〜心〜あ〜心〜ま〜心〜日
ての廓通の娘母さぬあも〜心〜ぞ〜心〜た〜心〜心〜心〜た〜心〜が
心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心
心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心
心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心
心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心
心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心〜心



のまきの毒と扱がしちきれて父きぬもおん編て
ちきれし無大徳や大徳のしめかきられぬお扱入
その内や父のまきごとく頼母さぬの内後さよりたきり
さぬの冷方あく徳の田舎くまきむつりあゆみあられも
是れあれたまのありあしるのぞいあるけれともは
縁もあぶらつりつり又お目かきむらんけし帰もあら下
海めてぬる母のまもるのしちよらあ田徳の涙お
まもるむらつりあはれ

是より着四季がられたあひあしんが大あか
縁ふい妻をまき母が英魂たきりか尻尻の庵こ
母縁引て着しきむら母のしり我ほきと上傾扱
のまよ汲あるの貞操か感とて頼母がそららひ
より滝中や紋女身信しとあまはたきりさへ
吉無らする途中お扱のとく頼妻先吉が熱斗
の働きさきんあひしんあつる最あられお面自れ
教向し続きお扱妻あしりある内き徳ん

約のちた下

三二

